

昔、首里城に各字<sup>あざ</sup>から夫<sup>お</sup>といつてですね、夫<sup>お</sup>といつたら、人夫<sup>ひと</sup>が行くわけですよ。手伝いに。行つて、あの場合、首里城ではこちら御殿<sup>うどうん</sup>、殿内<sup>どうんち</sup>と呼ばれます。殿内。殿内は茅葺きですからね。殿内に行つて。津堅という離れ島があるんですよ。離島が。

津堅<sup>ちきん</sup>バーマーといつてですね、これも有名な頓知のできる人ですよ。それで、わざわざそこに遅刻して、時間遅れて行つたらしいです。そしたら、向こうも津堅から来るのが遅いものだから、向こうもみんな作戦を持っているわけです。

「私たちは今日は遅刻してきておりますから、十日の月です、十日。十日の月が上がるまでやりますから」と。みんなは、

「はあ、通せ」と言つて。

「月が上がるまでやるならいいんじゃないか」と、みんな承知したらしいですよ。十日の月の上がるまでや

りますからと。たら、みんな考えないで、月は夜しか上がらないとしか考えていないもんだから、  
「十日の月が上がるまではやります。もう遅刻した分はそうしますから」と言つたらですね。十日からはもう月は上がっておるんですよ、昼から。昼から上がつとる。

「十日の月が上がつておるから、私たちは帰ります」と。そつでね、それを見たらみんな、月が上がつてるもんだから、がっかりしてですね、

「今日はやられてしまった」と。

それで、この人まだもう一つは、茅葺<sup>カヤフ</sup>きだから、みんなこの、葺き手はいるけれどもですね、みんなできないと言つて、

「私はもうできない。まだ茅葺きをやったことがないから」と。ここに確かに茅葺きの人はおるということとはわかつておるもんだから、

「そんなら私が葺きます。誰も葺かなければこれは、うちは今日で仕上げなければいけないし、仕上がらないから、私がやろう」と。それで、この人がですね、上がつてですね、ずっと上に、上のほうからですね、

一番上のほうから。茅葺きの場合、下から葺きますよ。一番上に上つてですね、

「茅を早くこつちに投げなさい」と。上から葺いたらしいですよ。

そしたらですね、下に茅葺きの名人がおることはおる。わかつておりますからね、この人がです。

「おい、貴様、茅は下から葺くのであつて、上から葺く馬鹿がおるか」と、さかんに上に上っている津堅バーマーに言うたらしいんですよ。そしたら、

「よし、貴様できるのにね、できないふりして。君、上りなさい」と。見つけてね、上せて、茅を葺かして家を。それで、いちいち仕上げて、立派に完成して。